
親友との間に起こる悲劇

桔梗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友との間に起こる悲劇

【Nコード】

N0258W

【作者名】

桔梗

【あらすじ】

「全ては、服部の見た夢から始まった。楽しい日常に突然、起こる悲劇。」

「工藤、待ってるや……。死ぬんやないで……。」

コナンは、無事に日常に戻って来れるのか……!?

シリアス系です。苦手な方はやめた方がいいです。大丈夫な方は、ぜひ読んで頂けるとうれしいです。

1：服部の夢からの始まり（前書き）

この作品には「残酷描写」が含まれています。
苦手な方はご注意ください。

「よかったわ・・・」

と服部は胸を撫で下ろす。一方、コナンは服部の言っている事がさっぱりわからず、

「はあ？何がだよ？」

と聞き返した。

「昨夜、変な夢見てもうたんや・・・。」

「夢って・・・。またかよっ！んでどんな夢だよ？」

と聞いた。

「なんや、暗いところでお前が攻められて、拳銃で撃たれる夢や・・・。」

服部は今日からものすごく嫌な予感がしていた。

「あの事件の時も、んな事いつてたよなあ。お前、勝手に人を殺すなよー。」

と呆れた声で答えたコナン。

「・・・。」

沈黙する服部。

「おい・・・おいつ!!」

コナンが服部を呼んだ。

「あつ・・・すまんすまん。」

いきなり、慌てた声で応答する服部。

「どうせお前の見た夢なんだろう？気にすんなよー」

服部は工藤の言う通りだと思い、話を変えた。

「あーそつやー!!今休みやし、明日そっちに行ってもかまへんよなあ?」

と服部は尋ねる。

(まあ。蘭もしばらく夏の空手特訓はないって言ってたし、服部とは最近会ってなかったし・・・いつか。)

「ああ。いいよ。」

とコナンは答えた。

「さよか!!よかったわあ。ほな!じゃあまた明日会おうなあ。ブチツ!ツーツー」

と服部は言って一方的に切った。

「なんか、最後だけハイテンションだったし・・・もう8時4

0分だし。・・・ふああああ・・・もう少し寝ようかな。」

コナンは寝始めた。

誰もがこの時、服部の言っていた「嫌な予感」がコナンに迫っているとは思ってもいなかった・・・。

1：服部の夢からの始まり（後書き）

主に、服部とコナン（新一）ですが、蘭たちも関与します。尚、この作品には「残酷描写」が含まれています。苦手な方はご注意下さい。ですが、最終的にはコナン（新一）は死にません。というか死なせません！まあ、危険な目には遭いますが・・・。

2、平和な日常（前書き）

ども。桔梗です。話の続きをどうぞ。

2、平和な日常

13時間後・・・

「・・・君・・・コナン君!!」

コナンは呼ばれ、起き上がった。

「あつ。蘭ねーちゃん。」

「もーっ。何時まで寝てるの!。もう11:00だよ!。」

蘭は困った顔で言った。

「えっ?そーなの?」

コナンは啞然だった。

「もう、ご飯作ってあるよ。一緒に食べよう!」

と蘭が優しい顔をして言った。

「うん!」

コナンは蘭と一緒にリビングへと向かった。

ーリビングー

コナンと蘭と小五郎は蘭の作った昼食を食べていた。

コナンはその最中に、服部の事を思い出した。

「あっ！蘭ねーちゃん！」

「ん？なあに？」

蘭は不思議そうに聞いてきた。

「明日、平次にーちゃんがこっちに来るんだって。和葉ねーちゃん
んは分からないけど・・・」

コナンは言った。

「そーなんだ！何時に来るの？」

と蘭は言い返した。

「へ？」

コナンは思ってもいない回答が返ってきて、途惑った。

「分からないの？」

蘭は、見透かしたように聞いてきた。

「うん・・・。」（一方的に切られたし・・・。）

とコナンは心の中で呟いた。

「もー。まったくしょうがないなあ……。コナン君は！」

蘭はコナンに軽いデコピンをした。

「へへへ。。」

コナンは苦笑いをした。

「でも、お父さん。いいよね？」

蘭は聞いた。

「ああ。暇だしな。」

小五郎は言った。

「ありがとうー!!お父さん！」

笑いながら、蘭はお礼をした。

「よかったね!コナン君！」

「うん。」

と平和な日常を過ごしていた。だが、刻々と暗い闇は近づいてい
た。。。。

2、平和な日常（後書き）

なんか、へんな終わり方ですみません……。次話もよろしくお願
いします。次は服部と和葉が来ますよ！。

3、服部、和葉との日々（前書き）

どーも。桔梗です。一日で3作！でもとっても楽しいです。小説描くの！まあ、どうぞお楽しみ下さい。

3、服部、和葉との日々

1 翌日 AM 9:00-

「・・・ん・・・」

コナンは起きた。

「そーいや、今日は服部が来るんだったなあ。そろそろ起きねーと・・・。」

「シャカ・・・シャカ・・・」

コナンは歯を磨いていた。

「しっかし・・・。何時に来るのかも言わねーで・・・。なんて気の変わりが早えー奴なんだあ？

服部は「・・・。」と歯を磨きながら毒づいた。そうすると後ろから

「こらっ！自分・・・！何か言ったか？」

と服部が怒った目でコナンを見た。

「へ？何でここに？ていうかまだ九時過ぎだぜ？来るのいくらなんでも早すぎだろ・・・。」

とコナンが焦った口調で言った。

「ああ。なんか心配でやなあ……。早いやつで来とったんや。でも安心したわ。」

と服部が安心した顔でコナンを覗いた。

「つか……。夢だろ？当たり前ーじゃねーか……。！」

コナンが馬鹿にした口調で言い返した。

「なんや？自分？その馬鹿とでも言いたいよーなその顔は？」

服部がコナンの目で察知した。

「別に……」

二人でからかうような会話をしていた。

ーリビングー

「あんたら、遅かったなあ。何してたん？」

と和葉が聞いた。

コナンは戸惑っていた。だが、服部は

「何でもええやんけ。俺はくど……。やのうてこの坊主とは久しぶりやから、話したい事が山ほどあんねん。」

コナンは作り笑いを蘭たちにした。

「あつ。服部君とコナン君ご飯食べる？」

蘭は聞いた。

「おっ！おおきに！ねーちゃんの手作りいいなあ！」

と服部が言った。それにイラツときたコナンは足で服部を蹴った。

「痛っ！なんや！蹴る事ないやんけ！」

服部は痛そうに蹴られた所を擦る。

「うっせえ。」

とコナンは睨んだ目で返答する。

「もしかして・・・自分？妬いてはりますなあ？」

と服部がコナンをからかう。

「んな・・・。妬いてねー！よっ！！」

コナンはついつい大声で言ってしまった。

「あつ・・・」

コナンはヒヤヒヤしていた。

「妬き・・・焼き・・・平次にーちゃん焼き芋食べたいんだあー。」

「コナンは誤魔化した。」

「服部君・・・。この季節に焼き芋は・・・。」

と蘭が困った顔で言った。

「いや・・・。気にせんでいいで！」

と服部は言い返した。

「面白いなあ！お前って！」

と服部が笑いながらコナンを見た。

「ほつとけ・・・！」

コナンは頬を赤くしながら、言い返した。

3、服部、和葉との日々（後書き）

読んでいただきありがとうございます。次話もお楽しみに！やっばり小説描くの面白いです！。

4、迫る・・・。暗い闇・・・（前書き）

またもや、一日でこんなに書きます。良かったら感想お願いします。

4、迫る……。暗い闇……

（1時間後）

ご飯を食べた後、和葉が久しぶりに会ったので、東京でデパート
巡りをしようと言ったので、出か

けることにした。その頃……

~~~~~

「ふふふっ……江戸川コナン……いや……工藤新一……  
お前はこの手で消してやる。」

……カシャッ……バンッ！バンッ！

その人物はコナン……いや……新一の写真を拳銃で撃った。

―東京 渋谷―

「いやー。さすがに東京は偉い人がぎょうさんおるなあー！」

と服部が吃驚したように周りを見渡した。

「いつも、こんなかんじよ。渋谷は。」

と慣れたような言い方で蘭は答えた。

「なあ！蘭ちゃん。一緒に洋服見にいこー！」

「うん！いいよ！服部君たちは？」

と蘭は聞いた。

「ああ。俺らはくどいよ……やのうてこの坊主とそこらへんぶらぶらするから心配せんといて！」

「そう……。じゃあコナン君をよろしくね！コナン君、服部君に迷惑かけちゃだめだよ？」

と蘭は子供扱いをした。

「はあい……。何でこんなガキ扱いされなきゃなんねーんだ……？」

とコナンは不満を感じつつ、蘭たちと離れた。

「なあ……。工藤……」

と服部は気が迷ったような声で言ってきた。

「ああ？何だよ。」

「今日、なんか嫌な予感せえへんか？」

「別に・・・？」

「さよか・・・。」

「おめー。まだあの夢のことを？」

「・・・。」

服部はものすごく考えふけていた。

「・・・。心配すんなって。大丈夫だって。そんな顔してちゃおめーらしくねえぞ？」

コナンは服部を励ました。

「（工藤・・・）・・・ああ。そうやな。」

服部は一昨日の事を頭にしまう事にした。

12時間後1

昼になったので、皆と合流し、昼食を外で食べることにした。

「ここのお店いって評判なんだよー。」

と蘭がわくわくしたような感じだった。

「へえー。早く食べたいなあ！」

と和葉もわくわくしていた。

並んでから数分後・・・

「あれ・・・私の携帯がない・・・。さっき、人とぶつかったから、その時に落としたのかな？」

と蘭が困っていた。コナンが蘭の顔を覗いた。

「じゃあ、僕が探して来るよ！蘭ねーちゃんは並んでて！」

とコナンが言った。

「じゃあ、俺も」

と服部もついて行きたい顔をしていた。

「うん。ありがとう。ごめんね！」

と蘭は申し訳なさそうな顔をして、二人の後ろ姿を見ていた。

「……………フフフッ……………」

もう、暗い闇はコナンの背後に刻々と迫っていた……………。

4、迫る……。暗い闇……。(後書き)

いやあ……。次話はついにコナンが……。次もお楽しみに！

5、起こってしまった悲劇・・・（前書き）

あー。桔梗です。なんかどんどん書きたくなります。続きが気になる人たちのためにがんばります。

5、起こってしまった悲劇……

― 駐車場 ―

静かで、暗い所で、二人は蘭の携帯電話を探していた。

「二人で一緒の所を探したら、時間がかかりすぎる……。二手に分かれようぜ！」

とコナンが言い出した。

「いや……。せやけど……」

服部が悩んでいた。

「大丈夫だ。お前はあつちな。」

コナンは走って行ってしまった。

「工藤……。」

タッタッタツ……

コナンは走りながら、探していた。

「なあ……坊主……」

「へっ?」

コナンは声のした方をふりかえった。

「坊主の探してるのは、これか?」

怪しい男は、粉々の携帯電話を見せた。

「てっ……てめえは……ビリッ!……うっ……」

怪しい男は、コナンをスタンガンで気絶させた。

男は、コナンを持ち上げ、車に乗せる時に、コナンのメガネが落ちた。

「ふん……。メガネごときで構ってられねえ……」

男は、車でその場を去った。

「おい。工藤!。エー——藤おおお!」

服部は、コナンを探していた。探していたら、ある物を見つけた。

「これは……。工藤のメガネ……。あいつ……。まさか!?」

「ある倉庫……」

「……。うっ……」

コナンは目を覚ました。

「ふっ……江戸川コナン……いや、工藤新一。」

男は恨みの目で見ていた。

「なんだ！？お前……なんで俺の事を知ってる？」

とコナンは尋ねた。

「俺は、ある奴から、お前を殺せと頼まれた殺し屋さ……」

「はあ？なんでだ？俺は恨みを買った覚えはねーぜ？」

「ふっ……。殺すといっても俺はお前を少しずつ殺っていく……頼まれた奴からの頼みだから」

なあ。ドーンツツツツ。」

おびただしい銃声が響いた……。

5、起こってしまった悲劇・・・（後書き）

今回、短いですが、でも、次話ながいかも・・・。次もお楽しみに！

## 6、悲しい想い（前書き）

いやあー。桔梗です。話の続き。あの銃声の後、コナンはどうなっ  
た？続きをどうぞ。

## 6、悲しい想い

ドーンツツツツ……！二つの銃声が響いた。

「グツ……。」

男は、コナンの腕を両方撃つたのだ。

「フフフツ。これで、妙な真似は出来ないはずだ……。」

「(クツ……クソツ……)」

―その頃―

「エエツ！？コナン君が誰かに誘拐されたあ！？」

蘭はものすごく驚いた顔で言った。

「駐車場にくど……やのうてあの坊主のメガネがやなあ……。」

「平次！あなたは何してたん？一緒やったんとちゃうん？」

和葉が焦った顔で聞いた。

「いや……。ねーちゃんの携帯を探すのは二手の方がいいとあの坊主が言うて……。」

「とにかく、蘭ちゃん！警察に電話せな！」

和葉は蘭に言った。

「そうだね……。」

「警視庁 通信指令室」

「はい。こちら、110番。通信指令室です。どうかされましたか？」

「あの、私毛利蘭といいます。あの警視庁の目暮警部をお願いします。」

「少々、お待ち下さい。」

「おお！蘭君。どうかしたのか？」

目暮警部が電話を代わった。

「コナン君が……。誘拐されたんです……。」

「何!？」

「あの、私……。どうしたらいいか……。」

蘭は、焦りのあまりあたふたしていた。

「落ち着きたまえ。蘭君。わしら、警察も協力する。ところで毛利君は？」

「お父さんは、事務所にいます。今から、お父さんにも知らせます。見つかったら、連絡下さい。」

「じゃあ、宜しくお願いします。・・ガチャン。」

「どうやった？」

「うん。協力してくれるって。」

と蘭は心配な気持ちの震えた声で言った。

「そら、よかったなあ。・・。」

「私たちはとにかくお父さんに知らせにいこう。服部くんは？」

「平次は、コナン君を探すってゆうてたわ。」

「そっか。コナン君がさらわれたのは、絶対私のせいだ。・・。」

蘭は、後悔と心配と悔しさで涙が溢れた。

「大丈夫やて。コナン君きつと無事やて。警察がいるんや。大丈夫や。・・。」

と和葉は蘭に言った。

「うん。。。」

蘭は小さくうなずいた。

## 6、悲しい想い（後書き）

蘭の優しさ……。こんなに思われてるコナン君！次話もよろしく！

## 7、迫り来る恐怖

ハッ・・・ハッ・・・ハッ・・・。

「やっぱり・・・やっぱり俺の嫌な予感は当たってたんや・・・  
しかも工藤を連れてった奴ごっつ

やばいかもしれへん・・・。あの時、すれ違ったあの男・・・親  
父から聞いたことがある・・・腕

利きの拳銃の使い手の殺し屋・・・工藤が狙われたとしたら・・・

「  
どンドン恐怖が迫って来た。

「(工藤・・・待ってるや・・・。死ぬんやないで・・・。)  
と服部は心から強く思った。

「阿笠邸」

「何！？新一が誘拐された!？」

博士は驚いた。

「そうや。工藤の身が危ないんや!」

「それは、奴らか!？」

と博士は焦った顔で言った。

「多分、違うと思うわ。奴らだったら、関わった人間は口封じにされるはず……。工藤君に恨み

のある誰かの……」

と哀が言った。

「多分。その通りや!なあじいさん、工藤の居場所が分かる方法ないんか？」

「探偵団バッチを新一が持っていれば……。」

「反応あるわ。」

と哀がいち早く調べていた。

「ホンマか!」

服部はビックリした声で口にした。

「ええ。」

「どこや?……分かった。そこに向かうよって、ポリに電話してやー!ブツツ……ッー」

「ちよっと、平次君!?切れたわい……。とにかく早く電話せ

んと・・・」

博士は、急いで警察に電話をした。

―ある倉庫―

コナンは、両腕、両足を撃たれ、動けない状況にあった。

「ハッ・・・ハッ・・・」

「フッ・・・次は・・・腹だ・・・弾を撃ち込んでやる。バンッ！」

「ゲアッ・・・!?!?」

コナンの体からは、内臓辺りをやられたらしく、おびただしいほど血が出てくる。

「・・・お・・・お前俺に・・・なんの恨みが・・・」

「お前が、解決した事件さ・・・」

「お前が解決した事件で恨みを持つてるのさ・・・。バンッ・・・」

弾は、横腹を貫通した。

「グアツ・・・ハアツ・・・ハツ」

男は、笑っていた。

「工藤新一も、これで最後だな・・・フフツ・・・」

男は、拳銃をコナンの頭に向けた。

## 7、迫り来る恐怖（後書き）

コナン絶対絶命のピンチ！？どうなってしまっのか？次話もお楽しみに！

## 8、親友との想い（前書き）

桔梗です！コナン絶体絶命！どうなる！？？お楽しみください。

## 8、親友との想い

「工藤新一も、これで最後だな・・・フツッ・・・」

男は笑いながら、コナンの頭へと拳銃を向けた。

「ハッ・・・ハッ・・・殺られる・・・」

とコナンが思ったその時、

「そこらへんで勘弁しとき・・・もう警察呼んだで。逃げられへん・・・」

服部が間一髪で現れたのだ。

「・・・服・・・部・・・」

コナンは大量出血のせいで気を失った。

「くそっ・・・」

男はそういつて逃げた。

「・・・おいっ！工藤！工藤！！」

服部は焦りながら、呼んだ。

「・・・服部・・・」

コナンは意識を辛うじて取り戻した。

服部は、出血を少しでも止めるため、応急手当をした。

「もうすぐ、救急車が来る！それまで頑張るんや！工藤！」

「ハア・・・ハア・・・ああ・・・」

「（でも、このままやと・・・。工藤が撃たれている所で重症な  
んは・・・腹部や・・・内臓を

やられてるやもしれん。脈拍も落ちてきてるしなあ・・・）」

「そして、まもなく・・・」

ピーポー・・・ピーポー・・・

救急車に早急に運ばれたコナン。服部も、その救急車に乗った。

「米花総合病院」

タツ・・・タツ・・・タツ・・・

コナンは、すでに、意識を失い、青ざめてきていた。

「これから、早急に手術を行います。そこでお待ち下さい・・・」

「  
病院の手術中ランプが点いた。

蘭たち全員が呼ばれ、手術中ランプを見つめていた。

「（コナン君・・・助かって・・・お願い・・・）」

蘭は心から願っていた。

「（工藤くん・・・）」

哀も、心底で願った。

「（工藤・・・。死ぬなよ・・・死んだら許さへんで！！あんな事を言っておいて・・・）」

服部は、倉庫で工藤に言われた一言をずっと気にしていた・・・。

「倉庫で」

「・・・服・・・部・・・」

コナンは声を振り絞って呼んだ。

「工藤！喋ったらアカン！」

と服部は怒鳴った。それでもコナンは話を続けた。

「来て……くれて……ありがと……な……」

服部は驚いた。そんな事、コナンが口にはしないからだ。

「工藤……お前……何諦めてんねん!!」

服部はコナンに怒鳴った。

「諦め……てねえよ……俺はあいつの前に……帰るまで……死なねえから……」

コナンは重症の体で、静かに笑っていた。

「工藤……」

ピーポ……ピーポ……

「工藤！来たで!!救急車！」

コナンは、もう気を失っていた。

「おい！工藤！」

服部は強く呼びかけた。その後脈拍を確認した。その後に救急車

に乗せられた。

「よし。まだ息はある……。」「工藤……。こんな所で諦めるんやないで……。ねーちゃんは

お前の帰りを待ってるんやで！」

と服部は心の中で言い続けた。

## 8、親友との想い（後書き）

いやー！どうなる？コナン君！でも死にはしませんから、ご安心を。

## 9、五分五分の命（前書き）

こんにちはー。桔梗です。遅れてすみません。楽しみにしている皆さん。どうぞ、ご鑑賞ください。

## 9、五分五分の命

―米花総合病院―

あれから、時間がたち、蘭や服部、和葉、博士、哀、小五郎が集まっていた。

あれから、6時間後、手術室から、医師が出てきた。

「コナン君は!?!?」

と蘭が慌てながら、医者に聞いた。そして、服部も、

「くど……やのうてコナン君は無事なんか?」

服部は、大声で怒鳴った。

「一命は……取り留めました……」

全員が、喜んでいた。

「ですが……」

医師は続きのあるような口で言った。

「ですが……何や?」

服部が恐る恐る聞いた。

「一部を除いてはいずれも急所を外れていたの、大丈夫なんです、もう一箇所の方が・・・」

「まさか・・・腹部に受けたやつか？」

服部は、寒気を走らせながら聞いた。

「はい。内臓の大切な血管を銃弾が傷つけていて、なんとか繋げたんですが、いつ急変しても、」

おかしくない状態です・・・。」

「そんな・・・」

一同は啞然となった。

「なので、意識が回復するまでは、集中治療室となります。」

「それで、・・・いつ急変してもおかしくないという事を・・・頭に入れておいて下さい・・・。」

一同は寝ずに待っていたのに、医師からのきつい一言が来て、愕然となった。

5分後・・・コナンはストレッチャーに乗せられ、人工呼吸器を着けられ、ぐったりとしている

コナンが手術室から、出てきた。

「コナン君!!」

蘭が呼びかけたが、コナンはなんの反応もなかった。

「まだ、安定していないので、安定するまでは、面会禁止とさせて頂きます……。」

医師は申し訳なさそうに、言った。

―集中治療室前―

「（工藤……あの時言っていた言葉……俺は死なねえから……俺はその言葉……信じるから……。」

服部はベッドに横たわるコナンをガラス越しで見ながら、心の中で、強く願っていた。

## 9、五分五分の命（後書き）

コナン君助かりましたが・・・どうなる？次話もお楽しみに。

10、嘘を本当に・・・（前書き）

桔梗です。ずいぶんおくれました。今回は少年探偵団が出てくる、  
帝丹小での出来事・・・

10、嘘を本当に・・・

―翌日―

コナンは、相変わらず安定しない方向にあり、まだ、集中治療室への面会許可は出ていなかった。

「コナン君・・・早く目を覚ましてよ・・・」

蘭は、恐怖と悲しさで涙がこぼれていた。

―帝丹小学校―

「えー。コナン君風邪引いたんですか？」

「ええ。そうよ。」

哀は、子供たちにはまだ言わない方がいいとおもい、コナンが集中治療室にいる事は話さなかった。

「あいつ、実は家で、食い倒れたんじゃないの？」

元太がコナンを馬鹿にするような事を言った。

「元太君とは、違いますよーお（笑）」

「え？俺は食い倒れたりしねーぞお？」

「はぁ・・・」

光彦があきれ果てた。

「じゃあ、みんなで学校帰りにお見舞い行こうよ！」

と歩美がみんなに言った。

「いいですねー。」「いいなあ！」

光彦と元太は賛成した。

「あー。実は彼、ものすごく咳の風邪らしくて、みんなに移したくないから来ないでって

言ってたのよ・・・」

哀はとっさに誤魔化していた。

「そうなんだぁ・・・残念だね・・・」

歩美はがっかりしていた。

「でも、大丈夫よ。彼、早く治して学校に来るって言ってたから。

」

「そうですよね！」「だよね！」「だよな！」

光彦と歩美と元太はうなずいた。

「(工藤君・・・あなたなら、また学校に戻ってこれるわよね?)」

「

哀は心の中でそう思っていた。

10、嘘を本当に・・・（後書き）

どうでしたか？感想頂けるとうれしいですっ！

11、安定している命（前書き）

桔梗です。コナン君の面会許可が出ましたあー！。

## 11、安定している命

―米花総合病院―

蘭や服部、哀、博士、小五郎は、コナンの担当医に呼ばれ、病院の会議室に入った。

「じゃあ、お話しします。」

医者が一同に向かってそういった。

「コナン君は、あんな小さな体なのに回復力が凄いです。この間、検査をしたら、安定して

いました。なので、面会許可を出したいと思います。ですが、今は安定していますが、また

不安定になる可能性は大いにあります。安定のままでいけるか、不安定になってしまうかは、

コナン君の問題です。ですが、いまの状態だと、安定のまま持っていけると私は思います。」

医師はそう告げた。

「じゃあ、コナン君の傍にいけるんですね？」

蘭は涙目になりながら、そう言った。

「はい。ですが、コナン君は今、菌に対する抵抗力がなくなっています。なので、集中治療室

に入る方は、消毒とマスクなどをして、入ってもらいます。」

「はい！」

蘭はうれしさのあまり、涙を流した。

「今日から、入れるんか？」

服部はそう聞いた。

「はい。」

医師は応答した。

「あれから、会議室に入って、20分が経ち、一同は、会議室から出た。」

「ねえ、私コナン君に会いに行くから、みんな先に帰ってて！」

蘭は弟のようにかわいがっていたコナンにいち早く会いたいのだ。

「おう。もう夜だから、少しあいつの顔みたら、帰るんだぞ・・・。」

「

と小五郎が言った。

「うん。分かった！」

と答えて、蘭はコナンのいる集中治療室へ向かった。

服部はその様子を見て、

「あー。すまん！俺、なんかトイレ行きとーなってもた。おっちゃん達先行っててや！」

服部は、トイレの方に向かった。

「何なんだ？あいつ・・・？」

小五郎は服部の後姿を見て、そうつぶやいた。

服部は、小五郎達の姿が見えないのを確認してから、廊下へと出た。

11、安定している命（後書き）

次話は、蘭の切ない気持ちが……。次回をお楽しみに！

12、蘭と服部の思い・・・(前書き)

桔梗です！。蘭とコナンの面会。服部は・・・？

## 12、蘭と服部の思い・・・

蘭は、走ってコナンの集中治療室に向かっていた。そして、集中治療室に着いた。

「ハア・・・ハア・・・あの・・・すみません！」

蘭は、荒い呼吸をしながら、集中治療室前にいる看護婦に話しかけた。

「何でしょうか？」

看護婦は優しく問いかけた。蘭は呼吸を整えて言った。

「この中にいる江戸川コナン君と面会したいんですが・・・。」

と蘭は看護婦に言った。

「よろしいですよ。ではこちらへ・・・。」

看護婦は、そう言って蘭に消毒やマスクなどをし、集中治療室へと入れた。

蘭は、コナンの元へと歩いて行った。

服部は、その様子をガラス越しで聞いていた。

蘭は予想以上に安定しているといっても、ぐったりとしているコナンを見て、涙目に

なりながら、こう言った。

「コナン君……」

蘭は呼んだ。でも、コナンは反応がなかった。蘭はコナンの手を握った。

「コナン君……あのね、私最近新一の声……メールも返ってこないんだ……」

「うっ……コナン君……私どうしたらいいかなあ……」

蘭の涙がコナンの手に落ちた。少しだが、コナンの手が動いた気がした。

「えっ……コナン君!？」

蘭は呼んだ。でも応答がなかった。

「私の気のせい……なのかなあ……」

蘭はガツカリしていた。蘭は医師の言っていた事を思い出しながら、こう呟いた。

「コナン君……私、待ってるからね……コナン君の声が聞けるのを……」

蘭は、コナンの手をベッドに置き、その場を去った。

服部は、蘭が行った後に、コナンに面会した。

「なあ……工藤……お前……早くあのねーちゃんにお前の  
ホンマの声聞かせなきゃ

あかんやろ……。俺さあ……お前の言った事、毎日頭に回って  
んねん……。」「

服部はこんな姿の親友を見てられず、短時間でこの場を去った。

12、蘭と服部の思い・・・（後書き）

今回は、短いです。次話は、ながいかな？ 疑問。  
次話をお楽しみに！

13、約束・・・(前書き)

こんばんは。桔梗です。なんか、いつも更新が遅い時間ですみませ  
ん・・・。

13、約束……

蘭や服部、小五郎、博士、哀がコナンのお見舞いに行ったりして  
いるうちに、一週間が、

経った。

ー帝丹小学校ー

キーンーコーンーカーンコーン……

「コナン君は今日も休みです。じゃあ、みんなー一時間目の準備  
をしてねー。」

『はーい!』

クラスのみんなが声を揃えて、挨拶をした。

「あの……灰原さん……。」

光彦が、問いかけた。

「何？」

哀が返した。

「コナン君……。本当に風邪何ですか？」

光彦が、疑問に思っていた事を哀に言った。

「あいつ、全然電話したりとかしてくんねえしよ……」

元太も言った。

「コナン君がこんなに、学校に来ないのはおかしいよーお……」

歩美も心配そうに言った。

「……。」

哀は黙った。

「灰原さん！」「灰原！」「哀ちゃん！」

光彦と元太と歩美は声を揃えて、哀の名前を呼んだ。

哀は、もう隠せない。この子達ならきつと受け入れてくれると思  
い、話そうと思っていた。

「昼休み……話すわ。」

哀はそういってその場を去った。

「昼休み」

「あなた達……今から言う話、なにがあっても受け入れられる？」

哀は試すような目で少年探偵団を見た。少年探偵団は、少し黙った後……

「はい。」「おう。」「うん。」

三人ともうなずいた。

「江戸川君は今、病院なの……。」

「えっ？」

三人とも、声を揃えて言った。

「しかも、重症で、今集中治療室にいるわ。それにまだ、意識不明だわ……。」

『……』

しばらく、三人とも黙っていた。そして最初に口を開いたのが……

「……でも、私はコナン君は絶対大丈夫だと思っ！」

歩美だった。

「そうですね。」「そうだなっ!」

二人も、笑顔になった。

「(やっぱり・・・この子達、強いわ・・・)」

哀は、心の中で、安心していた。

「お見舞い行けるんですか?」

光彦が、問いかけた。

「悪いんだけど・・・今はまだ・・・江戸川君が意識を取り戻したら、連絡するわ。」

哀はそう約束した。

「約束だよっ!」

歩美は元気よく言った。

「ええ。」

哀は微笑みながら、うなずいた。

13、約束・・・(後書き)

約束が結ばれました！次話は、いよいよ・・・！？

## 14、戻った意識

コナンが病院に来てから、もう、2週間が経とうとしていた。

―翌日 集中治療室内―

「コナン君……。私もう、耐えられないよ……。」

蘭は、2週間もコナンの声……。それに新一からも音沙汰がない事で気力を無くしていた。

「う……。うっ……。うっ……。ポタッ……。」

蘭の涙がコナンの手に落ちた。その時、コナンが自分の手を使って蘭の涙を拭いた。

「え……。」

蘭は、一瞬、声が出なかった。

「……。ら……。ん……。。」

確かに聞こえた。コナンの声。

「コナン君!？」

蘭はこらえられない程の涙が噴出していた。

「泣く……。なよ……。」

コナンはまだ、意識が朦朧としているが、確かに目を開けていた。見ていた看護婦が、

「先生を呼んで来ます！」

と言い、走っていった。

「コナン君・・・2週間も眠ってたんだよ！？私、寂しかったんだからあ・・・」

蘭は笑いながらも、泣いていた。

「・・・そつか・・・分かったから泣かないで・・・蘭・・・ねーちゃん・・・」

コナンは人工呼吸器を着けたまま、困った顔で言った。

「気にしないで・・・うれし涙だから・・・」

蘭は笑った。

― 集中治療室前 ―

医師がコナンの検査をしていた。

そして、また会議室に一同は呼ばれた。

「コナン君の意識は回復しました。驚きました。コナン君の、強さには・・・」

医師は言った。

「今後のコナンは・・・」

小五郎は聞いた。

「はい。コナン君は、意識が回復しました。ですが、まだ、軽度の呼吸障害が残っているので、

このでっかい人工呼吸器ではありませんが、酸素マスクは必要となりますが・・・、ですが

コナン君は普通の病室には戻れます。」

その医師の言葉を聴き、一同はみんなほっとしていた。

「ですが、起き上がる動作を彼がするようなことがあれば、止めてあげて下さい。彼は起き

上がるのは、まだ駄目ですので・・・」

医師はそう言った。

「はい。分かりました。」

蘭はそう答えた。

「医師にはコナンの病室を教えてもらい、一同は、コナンの病室へと向かった。」

#### 14、戻った意識（後書き）

コナン君意識戻りましたぁー！次話も更新頑張ります。

## 15、悪夢を打ち消した方法（前書き）

桔梗です。ずいぶん遅れてしまいすみません。私また新しい連載小説を出す予定です。まだ決まってませんが、そっちも宜しくお願ひします。

## 15、悪夢を打ち消した方法

会議室を出た一同はコナンの病室へと向かった。

「病室」

コンコン！・・・ガラ・・・ガラ・・・ガラッ・・・

「はいっ！」

一同が入った。

酸素マスクと点滴をしていたが、笑っているコナンがいた。

「コナン君大丈夫？」

蘭が気にかけた。

「うん。大丈夫だよ。」

コナンは笑って言った。

「それから、2時間はコナンは話していた。

「じゃあ、コナン君！また来るからね。」

「無理するんじゃないぞお。」

「おっちゃん達先帰っててや。俺この坊主と話す事があるんや。」

服部は、そう言った。

「おう。」

小五郎は、うなずき、蘭達は病室を後にした。

「工藤……。ホンマにお前が助かって良かったわー。」

「心配かけて悪かったな……。」

「なんや？やけに素直やな？」

服部は疑問に思っていた。

「なんか本調子じゃねーし……。それになんか意識が飛んでた時に助けられたんだよ。」

オメーらに……。なんか、お前や蘭の声が耳に聞こえた感じがして。」

コナンはその時の自分の状況を服部に話した。

「さよかー！」

服部は微笑を浮かべながら、話した。

「俺はオメーらの強い気持ちがあれば、悪夢に負けてた。だから、ありがとな。」

「なんや。照れるやんけ・・・！」

服部は赤い顔をして、コナンの顔から目を離した。

「俺、今日ここに泊まるわ。」

服部はコナンを見て言った。

「へ？なんで？」

「なんでって・・・お前が無茶な行動をせんように見張ろつと思つてなあ。お前目離すと

危険やから。」

コナンはしばらく不満そうだったが、

「しょうがねえなあ・・・」

コナンは、仕方なく同意した。

## 15、悪夢を打ち消した方法（後書き）

コナン君の目覚めた訳はこんな感じですね。次話もお楽しみに！感想も宜しくお願いします。

## 16、親友の危機（前書き）

桔梗でーすつ。第二作も出しました。そちらも宜しくお願いします。

## 16、親友の危機

―深夜の病室―

服部は、しばらくコナンと話していた。服部はいつの間にか眠っていた。

「あれっ？コイツ寝てやがる。はぁ・・・」

コナンはしばらく起きていた。

「なんか眠れねー。」

その時、病室のドアが開いた。

「へ？誰？」

コナンはその人物の顔を見た。

「お前は!？」

コナンは驚いていた。

「ふん。てめえのお陰でサツにかぎまわられちゃった。ここに居る事もいずれサツに・・・」

あそこまで、撃つたのにまだ生きてるとはな・・・お前その酸素マスクをしてる事からして

そこから、動けねえんだろ……」

現れたのは、あの時の奴だった。

「ウィーン……」

病院の下に警察が来た。

「まさか……てめえ……捕まる前に俺を殺る気か？」

コナンは、平静を保ちながら、聞いた。

「ふん。よく分かったなあ……さすが工藤新一だ」

男は笑った。

「まずは、そのお前のダチから殺そうか……。」

「何っ！」

コナンは平静を乱し、怒った顔で男を見た。銃口は服部に向けられていた。

「ドンッ！バァン！」

コナンは服部を蹴っ飛ばし、銃弾は服部に当たらずに済んだ。

「銃口はコナンに向いていた。だが、危機一髪でその男は、警察に取り押さえられた。」

コナンは警察が行くまで、大丈夫だったと言っていた。・・・だが・・・

## 16、親友の危機（後書き）

今回は短くてすみません・・・次話もこれから出します。

## 17、開いた傷

男は、警察に取り押さえられ、警察に連行された。コナンの身には恐ろしい事が起こって

いた……。

「服部！大丈夫か？」

コナンは心配した顔で、服部の顔を覗き込んだ。

「へ？大丈夫やけど……？」

服部は、驚きながら、言った。

「良かったあ……。」

コナンは冷や汗をかきながら言った。

「おい？工藤？」

服部はコナンの様子がおかしい事に気がついた。

「ハアツ……ハアツ……大……じよぶ」

コナンは途切れ途切れに言った。

「まさか……工藤！」

服部はコナンの上にかかっている布団をめくった。すると・・・

「おいっ！工藤なんで黙ってたんや！」

服部は大声で怒鳴った。シートには、大量の血がついていた。

「大丈夫だつて・・・傷が開いたただけだから・・・」

服部はナースコールを押した。

「大丈夫なわけないやろ！」

服部はナースが来るまで、止血処理をしていた。

「どうされましたか？えっ！」

ナースは驚いていた。

「今、医師を呼んで来ますっ！」

ナースは慌てて走っていった。

ーすぐに、医師が来て、傷を塞ぐ手術が行われた。1時間後、ドアが開いた。

・・・ガーツ。

ドアが開いた。

「くど……やのうてコナンは？」

服部は医師に聞いた。

「大丈夫です。あなたが行った止血処理のおかげです。止血処理をしていなかったら、

危険でした。今は麻酔をしていますが、じきに目を覚ますでしょう。」

医師は説明をした。

「そうか。良かったわ……」

服部は、胸を撫で下ろした。

・コナンは、病室に運ばれ、服部はコナンの病室へ向かった。

―次の日―

「ん……」

コナンは目を覚ました。

「工藤！大丈夫か？」

コナンは服部を見た。

「助かったのか……。」

コナンは小さい声で言った。

「感謝するんやで……俺が、止血をして、すぐに医者に知らせてやったんやから。」

服部は威張るような口調で話しながらコナンを見た。

「そつか……奴は捕まったんだよな。」

「ああ。捕まったで！これで安心や。工藤しばらく絶対安静やらな？」

「わあーってるよ！」

コナンは、うるさいなと言うような顔をしていた。

服部とコナンはしばらく病室で笑いながら、話していた。



17、開いた傷（後書き）

なんか、へんな終わり方ですみません・・・。

18、やって来た少年探偵団（前書き）

随分、遅れてしまいどうもすみません・・・  
少年探偵団が来ます。でもコナンの様子が・・・

18、やって来た少年探偵団

―帝丹小学校―

「えっ！コナン君の意識が戻ったんですか！？」

光彦はうれしそうに言った。

「ええ。まだ、絶対安静だけどね。お見舞いは大丈夫よ。」

「やったあー！コナン君に会えるー！」

「じゃあ、今日行きましょう！」

『賛成！』

歩美と元太は元気よくうなずいた。

―病室―

コンコン

「どひひぞ」

コナンの病室はガラガラと開いた。

「コナン君!」「コナン!」

三人は、元気よく入って来た。

「オメーら久しぶりだなー!」

コナンは、小さい声だが、うれしそうに言った。

「コナンくん?大丈夫ですか?」

「大丈夫。」

「それから、学校の話などをし、暗くなったので、少年探偵団は帰る事にした。」

「じゃあ、コナン君また来ますから。」

「コナン君早く元気になってね!」

「じゃあなー!コナン!」

三人は病室からでて行った。

「ハア・・・ハア・・・」

「あなた、無茶するのね・・・」

ドアの所に立っていたのは、哀だった。コナンは、高熱を出していたのだ。

「しゃーねだろ・・・あいつらに迷惑掛ける訳にはいかねーから  
さ・・・」

コナンはベッドに倒れこんだ。

「ちよつと工藤君!？」

哀はコナンに駆け寄り、額に手を当てた。

「あなた、無茶すぎよ!いくらなんでもこんなに熱があるのに  
起きてるなんて!」

哀は高すぎる高熱に目を見開いた。

「・・・」

コナンは気を失った。

「ちよつと!?!工藤君!」

「哀は必死に呼びかけたが、コナンに応答は無かった・・・」

18、やって来た少年探偵団（後書き）

コナンが高熱で倒れてしまいました。どうなる？次話もお楽しみに！

19、高熱の訳と蘭の思い・・・（前書き）

桔梗です。タイトルがまともならず、すみません・・・。まあ19話を  
をぶじぞ。

19、高熱の訳と蘭の思い・・・

「ちよつと！？工藤君！」

コナンは哀と話している途中に倒れてしまい、哀がコナンの額に手を当てると、かなりの

高熱であつた・・・。

―それから、少しした後にはコナンの病室の外には、蘭や服部、小五郎、博士が来て、

担当医はコナンの容態をチェックしていた。あれから、一時間後・

「コナン君はいきなりどうしたんですか？」

蘭はコナンの担当医の医師に、顔を引きたらせながら、聞いた。

「術後の免疫力低下による高熱ですね。コナン君は、あんまり睡眠をとらず、お見舞いに

来た人の相手をしてたみたいですね・・・。コナン君の体はかなり弱っていました。でも

本人はそういう風に見えないように、隠していた・・・無茶をし

ていたんですね……」

医師は、蘭達一同一人一人の顔を見ながら、話した。

「くど……やのうてコナンは大丈夫なんか？」

服部は、誰よりも先に医師に問いかけた。

「はい。大丈夫です。解熱剤を点滴してますし、今はぐっすり寝てると思いますよ。」

医師は、説明をゆっくり話した。

「よかったー……」

蘭は、ほっとして脱力してしまった。気が付くと小五郎に支えられていた。

「蘭？大丈夫か？」

小五郎は、蘭の肩を支えていた。蘭は力なく言った。

「……大丈夫だよ。少し緊張感が抜けて疲れちゃっただけだから。」

蘭は、小五郎の顔を見て、力なく笑いながらそう言った。

「そうか……じゃあ蘭、コナンの見舞いは明日にしてお前は休め。」

小五郎は、疲れている蘭を見て、そう言った。

「でも……。」

蘭は、自分の事より、コナンの事が頭から離れなかった。蘭は今日付きつきりで看病

するつもりだったのだ。

「コナン君の看病しようと思ってたんだけど……。」

蘭は、思っていた事を口にしてみた。

「蘭、お前の看病がしたいというその優しさは大事だと思う……。だが、それでお前

が倒れたりしたら元も子もないし、コナンが自分のせいでお前が倒れたと思ったら、

あいつ悲しむぞ。」

小五郎は心配した顔で、蘭を見ながら話していた。

「そうや！看病は俺がやったるさかい。ねーちゃんは家で休んだ方がええ。」

服部も、小五郎の言葉に繋げるように言った。

蘭は、しばらく考えたが、二人の言っている事は本当だなと自分の中で考え、コクリと

うなずいた。それから、しばらくした後、小五郎と蘭は帰って  
いた。

19、高熱の訳と蘭の思い・・・（後書き）

小五郎と蘭が今回の話は中心となりました。次話は服部が中心かな  
？ 予定

## 20、コナンと服部（前書き）

すみません。遅れました。意外と時間がかかってしまって・・・  
20話どうぞ。

## 20、コナンと服部

服部は、蘭達を見送った後、コナンの病室へと向かっていた。

・・タツ・・タツ・・タツ・・ガラガラツ・・

服部は、静かにドアを開閉し、コナンのベットに向かった。そして、そばにある椅子に

座り、コナンの熱を確かめた。コナンは、目を覚ました。

「あつ、すまん。起こしてもたか？」

服部は申し訳なさそうな顔をしていた。

「別に。大丈夫。」

コナンは、笑いを浮かべながらそう言った。

「まだ、熱ありそうやな……。にしても工藤！。お前無茶すぎやで！工藤40度近く

あつてな、大パニックやったんやで！」

服部はその時あった事をコナンに、興奮したような声で言っていた。

「服部……んな声出さなくても聞こえてるって。」

コナンは軽く睨みつけながら言った。そうすると服部は……

「すまんなあ！工藤の耳にはあのねーちゃんの声しか聞こえんのかと思うてな！」

服部は、いつものようにコナンをからかってみた。

「なっ……」

コナンは赤面になっていた。

「いやー。かなわんなあー。同居生活してるお二人さんには！」

服部は、横目で苦笑いを浮かべながら、コナンを覗いた。コナンは頬を赤くしながら、

服部に、反撃した。

「バーロツ！！そんなんじゃねーよっ！」

コナンは、同居しているのは、事実なのだがからかわれると、心境としてはものすごく

恥ずかしい。

「あらら！工藤！真っ赤やで！」

服部は、さらにかかった。

「これは・・・熱のせいだよ！俺寝るっ！」

コナンは、正直言つと寝すぎて全く眠くないのだが、これ以上か  
らかわれると、言葉が

出なくなりそうなので、布団に潜った。

「面白いなあ！お前！」

服部は、コナンの行動をものすごく爆笑していた。

「……………」（服部……………覚えてろよっー！）

コナンは、赤くなりながら、心の中で呟いた。

## 20、コナンと服部（後書き）

なんか、むずかしい……。次話は、もっとまとまるように頑張ります。

## 2-1、服部の見破り（前書き）

二日もあいてしまい、ホントにすみません・・・。2-1話どうぞ。

## 21、服部の見破り

1次の日になり、コナンがまだ寝ている時に、主治医の先生がコナンの病室に訪れた。

医師はある事を告げた。コナンは、まだ高い熱はあるが、怪我の方は直りつつあり、

もう心配はほとんどないとの事だ。やっとコナンは酸素マスクが外された。それに、

熱が下がったら、病院の中だけだが、外出許可が出た。そう言う  
と、医師は服部に

軽く首を下げ出て行った。その30分後・・・

「……………んーっ……………」

コナンは目を覚まし、ある違和感に気が付いた。

「あれっ？酸素マスクが外された？」

コナンは、キョトンとした顔をしていた。そうすると、服部が、

説明を始めた。

「もう、大丈夫なんやと。お前はぐっすり眠ったから、気づかなかつたんやな。」

服部は、コナンの顔を窺いながら、そう言った。

「ふーん・・・そうなんだ・・・ってあんだよ？さっきから人の顔ジロジロ見やがって」

コナンは、不愉快そうに、服部を睨みつけた。

「あ・・・いや！工藤、具合悪くないんか？まだ、熱ありそうやけど・・・」

服部は、コナンの具合を聞いてみた。

「大丈夫。」

コナンは、普通に返した。服部は、コナンの顔色を確認した。

「工藤。お前少なくとも少しは具合悪いやろ?」

服部には、コナンの嘘はお見通しだった。

「……。まあな。でも、少しくらくらするだけだから。」

コナンは、平気と言いたそうな顔をしていた。

「やっぱりや。お前嘘へたやからな……お見通しやで!誰が見たって分かる。」

服部の言う通り、コナンは、顔色が悪くとても調子のいい状態には見えなかった。

「……。」

コナンは、服部の様子を窺っていた。

「工藤、寝た方がええで。早く体直せば、病院内だけやけど外出られるんやで?」

服部は、コナンが寝ている時に、言われた事をぶつけてみた。

「まじ?」

コナンは、服部に疑問で返した。

「本当や。」

服部は、笑いを浮かべながら、コナンを見ていた。

「久しぶりに外に出られるんだなっ!病室ものすごく飽きたから、出たかったんだよなー!」

コナンは、本当の子供のように、無邪気に喜んでいた。服部は、喜んでいいるコナンを見て、

服部も笑顔になっていた。

「工藤、本当に子供にしか見えへんで!」

コナンは、服部のその言葉を聞いて、一気に喜びがひき、恥ずかしくなった。

「・・・ほっとけ!・・・」

コナンは、クールになった。

服部は、コナンの恥ずかしがる顔を見て、にっこりと笑った。

少し、服部がコナンをからかった後、コナンは眠りについた。

## 21、服部の見破り（後書き）

ホントに、なんかまとまらなくてすみませんっ！  
次話は、蘭達ができます。

22、再び・・・(前書き)

かなり、遅れてしまいました・・・。すみません。

## 22、再び・・・

ーコナンは、服部と話をしている最中に、熱を出し、倒れてしまった・・・。

服部は、コナンの額に手を当ててみたら、触っただけでものすごくコナンは熱かった。

服部は、コナンの熱を下げるために、とりあえず、冷凍庫の中に医者が入れておいて

くれた、アイスノンを取り出してタオルの上から、コナンにあてた。その後、コナン

の看病をしていた。服部の看病で、コナンは熱が38度台まで下がっていた。

コナンの熱が落ち着くまでに、かなり時間が経ち、もう午後十時になっていた。

服部は、コナンが落ち着いたのを見ると、一安心し、自分も椅子に座り、コナンの

ベッドの端の所を使い、寝てしまった。

## ー次の朝ー

服部は、気がつくともナンの隣のベッドに寝ていた。服部は、コナンの方を見ると、

コナンは起きていて、蘭がいた。服部は、正直今の状態で自分が起きたらいいムード

を壊す気がしたので、しばらく様子を窺っていた。

「コナン君、大丈夫？服部君が、また熱が出たって言ってたけど・・・」

蘭が、ものすごく心配そうな顔でコナンの顔を覗きこんだ。

「うん。大丈夫だよ。もう熱は大分下がってるから！」

コナンは、顔を赤くしながら、答えた。

「えー！でも顔赤いよ？」

蘭は、眉をしかめながら、言った。

「大丈夫。これは違うから。」

コナンは、蘭から顔を逸らした。蘭は、少し疑問に思ったが、気にしなかった。

「コナン君？飲み物いる？喉渴いたでしょ？でも、コナン君は刺激の強いのは駄目よ？」

蘭は、言いつけるような口調で言った。コナンは、いつも刺激が強い物しかあまり飲んで

いないので、ものすごく悩んだ。

「……お茶かなあ？」

コナンは、かなり悩んだ。

「うん！分かった。じゃあ行ってくるね！」

蘭は、笑顔でコナンの病室を出て行った。

22、再び・・・（後書き）

次話は、服部とコナンと蘭です。（予定）  
次も、お楽しみに！

### 23、服部と蘭との一日

蘭は、病院内にある自動販売機で飲み物を買ったためにコナンの病室から離れていた。

ーコナンの病室ー

コナンは、窓の外を眺めていた。服部は、蘭のいない隙に起きようかと思いきや静かに

起きた。コナンは、窓を眺めている時に物音がしたので振り向いた。服部はすぐく

びつくりしていた。

「よっ・・・よお！工藤！！大丈夫なんか？」

服部は、気を取り直してコナンに聞いた。

「えっ・・・？大丈夫だけど？お前は大丈夫なのかよ？ほとんど寝てなかったんだろ？」

コナンは、少し心配したような顔で言った。

「俺は、大丈夫や！」

服部は、笑顔で返した。その後、コナンの病室のドアが開いた。

「ガラガラガラ……」

缶を、手にいっぱい持っている蘭が入ってきた。

「あつ！服部君起きたんだね。服部君は、どれが飲みたい？」

蘭は、近くにあった棚に缶を並べた。蘭が買ってきたのは、コーヒーとカフェオレと

お茶二本に紅茶だ。服部は、

「俺は、コーヒーだな。」

服部は、いろいろな缶の中からコーヒー缶を手を取った。

「コナン君は、お茶ね！」

蘭は、コナンにお茶缶を手渡した。

「じゅあ、私もお茶にしようかな？」

蘭も、コナンと同じお茶にした。

コナンは、そっと起き上がりお茶の缶を開けた。

開けた後、ゆっくりと飲み始めた。

「コナン君？熱大丈夫？」

蘭は、心配そうに覗き込んできた。

「大丈夫だよ！」

コナンは、顔が赤くなり、そっぽを向いた。

それを見ていた服部は、苦笑いを浮かべていた。

「そんな会話を続けているうちに缶は空になった。コナンは、横になりぼーっとしている

うちに睡魔が襲い、いつの間にか眠りについていた。

## 24、嬉しい知らせ(前書き)

どうも、桔梗です。

本当にまともりがなくなってますみません・・・。

まあ、24話をどうぞ。

## 24、嬉しい知らせ

コナンは飲み物を飲んだ後、眠くなってしまう眠りについていた。その間に、

コナンの病室に担当医の先生が、部屋に入ってきた。

コン・・・コン・・・

「どっぞ。」

蘭が、コナンを起こさないように静かな声で言った。医師も、蘭の声の大きさをで、

コナンが寝ている事が分かり、静かにドアを開けた。

ガラガラッ・・・

「あっ。どうも。」

蘭が、丁寧にお辞儀をした。

「蘭さんと服部さん。ちょっとよろしいでしょうか?」

医師は、蘭と服部をコナンの病室の外に誘い、会議室へと呼んだ。

蘭と服部は医師の後へとついて行った。

―会議室―

会議室に着き、医師は蘭と服部を会議室の椅子に座らせた。

「どうしたんですか？先生？」

会議室に着いてから、先に口を開いたのは蘭だった。

「コナン君の事です。この間の検査の結果が出て、コナン君はかなり順調に回復して

います。最近に起こった急な高熱も下がったようですし、このままいけば、あと一週間後

には退院出来るでしょう。」

医師から、告げられたのはかなりうれしい事だった。二人は微笑んだ。

「ホンマか！」

まず、服部が大きな声で喜んだ。

「良かったあー！」

蘭は、ほっと胸を撫で下ろした。

「退院出来ませんが、退院してから三日くらいはご家庭でお過ごし下さい。コナン君は、

免疫力が弱っているうえに、体力も落ちていると思うので……。退院後は薬を少し

出しますが、食事も気を使ってあげて下さい。あと、コナン君には退院の事起きたら

説明してあげて下さい。」

医師が、蘭と服部に丁寧に説明をした。蘭は、しっかりと聞き、コクリとうなずいた。

「分かりました。」

―説明が終わり、蘭と服部はコナンの病室へと戻った。

ガラガラッ・・・

蘭が静かにドアを開けて、その後が続いて服部が入った。

入って見たら、まだコナンは寝ていた。蘭はコナンの隣に座り、服部は腕時計で

時間を見ていた。時刻は、PM7:00になろうとしていた。服部は、この時間で正直

眠くなっていた。服部は耐えられずあくびをした。そしたら、蘭が話しかけてきた。

「服部君、眠いでしょ？寝た方がいいんじゃないかな？」

蘭は、心配した顔で言った。服部は正直本当に耐えられそうになかったので、そう

する事にした。

「すまんなあ。ねーちゃん・・・俺、ちょっと寝させてもらっわ。」

服部は、その場の椅子を使い、壁にもたれ掛かり眠りについた。

蘭は、服部よりは

起きていたが、途中で眠くなり、コナンのベッドに手を置き、眠りについた。



## 24、嬉しい知らせ（後書き）

コナンが退院間近！

やっとかよ……って感じですよね！（笑）

## 25、久しぶりの外（前書き）

ども。桔梗です。

八月に作った時と違い、一話一話が短いのはお許し下さい！

## 25、久しぶりの外

―蘭と服部はコナンの部屋で、眠っていた。

二人は、この日には目覚めなかった。

―翌日―

次の日、やわらかい日差しがカーテンを突き抜け入ってきていた。

時刻は、朝の8時になっていた。

最初に、目覚めたのは病状が回復したコナンだった。コナンは、久しぶりにいっぱい

寝たので気分がすっかり良くなっていた。コナンは眠っている二人の姿を見て、こう

思った。

「（随分、迷惑かけちゃったな……。）」

コナンは、考えこんだ顔をして、二人の顔を見た。コナンは久しぶりに外が出たかった

ので、近くにあったメモ用紙に書置きをして、静かに病室を出た。

「コナンは、病院内にある中庭に向かっていた。コナンの病室から中庭までは結構、距離

があり、以前外に出た時は車椅子で押ししてもらったので疲れなかったが、今回は歩きな

ので久々に動いたコナンは中庭に行くだけで疲れてしまった。だがなんとか中庭に着いた。

「中庭」

コナンは、やっとの思いで中庭に着いた。コナン以外にもいろんな患者がいた。コナンは

近くにあった椅子に腰かけた。

「……ふう……（なんかこんな事だけで疲れるほど体力が落ちてやがる……まあ

当たり前か。ここ最近動けなかったしな……）」

コナンは、情けない思いでいっぱいだった。

コナンは、しばらく空を見た後、帰るのに時間がかかる事を考えて部屋に戻る事にした。

## 25、久しぶりの外（後書き）

この小説ももう少しで終わりですっ！

この話が終わったら、もう一つの方の小説を書こうと思いますので  
宜しく願います。

26、退院まで・・・(前書き)

短いですが、どうぞ。

26、退院まで・・・

コナンは、ゆっくり歩いて病室に向かっていた。そして、辿り着きそつとドアを開けた。

「ガラ・・・ガラッ」

コナンが、病室に入ると服部と蘭は起きていてそこには、担当医の先生がいた。

先生は、戻ってきたコナンの顔を見た。コナンが疲れているのが分かったようで、

コナンに声をかけた。

「コナン君？大丈夫かい？」

コナンは、先生の言葉に笑いながら答えた。

「大丈夫だよ！久しぶりに外に出たんで、少し疲れちゃっただけ

だから！」

先生は、納得したような顔で、話の本題に入ろうとしていた。

「コナン君。とりあえずベッドに来てくれる？立ってるのは辛いだろうから。」

コナンは、疲れていたのですぐベッドに入り、寝転がずに座った。先生は、コナンがベッドに入ったのを確認すると本題に入った。

「じゃあ、この間言った、退院の話ですがコナン君の退院日が決まりました。

コナン君は、明後日には退院できます。まあ、退院してもしばらくは薬が出るんですが。」

コナンは、やっと退院できる！とでも言いたそうな顔をしていた。

「学校は行っても構いませんが、退院してから二週間は体育はやめて下さいね。」

コナンは、がっかりした顔をしていた。それで思わず口を開いた。

「やっぱり、サッカーも駄目？」

コナンが子供のような声で先生に問いかけた。

「駄目だなあ……。コナン君散歩して分かったと思うけど、今のコナン君の体は

しばらく動いてなくて、疲れやすい体になっているんだ。だから、薬で治して行かなければ

ならない。その薬は激しい運動などをすると失神しやすいんだ……。だから二週間だけ

だから、我慢してね。」

先生は、コナンに丁寧に優しい言い方で言った。コナンは先生の言うとおりにかなり疲れやすく

なっているのは、承知していたのでコクリとうなずいた。先生は、

コナンの顔を確認した後、  
部屋を出て行った。

26、退院まで・・・（後書き）

コナン君、いよいよ退院。この小説もラストスパート！

## 27、落ちていた体力（前書き）

どうも。桔梗です。修学旅行でしばらく更新できませんでした。まあ、どうぞお楽しみ下さい。

## 27、落ちていく体力

「あっという間に退院日の二日が経ち、コナンは退院出来る事となった。蘭はコナンの退院

手続きをしていた。相変わらず、運動制限という現実なのだが、それでも退院出来るという

事は嬉しかった。久しぶりに親友の笑顔を見た服部は、誰よりも嬉しかった。蘭が、退院

手続きを終えると、蘭、服部、小五郎、コナンは病院を出て、小五郎の借りたレンタカーに  
乗り込んだ。

「車の中」

車は、毛利探偵事務所に向かっていた。運転しているのは、もちろん小五郎で助手席に服部、  
後部座席にコナンと蘭という席順だ。

「コナン君！いよいよ帰れるね。私たちの家に！」

蘭が、笑顔でコナンを見ると、コナンはオドオドしていた。

「へっ!?!うっ・・・うん。」

コナンは、赤くなり冷や汗をかいていた。そのやりとりを見ていた服部は、ちよっかいを

出したような顔をしていた。その視線に気がついたコナンは、服部を睨んだ。服部は慌てて

前を向いた。コナンはそんな服部を見てため息をついた。そんな事をしている内に車は

探偵事務所に着き、小五郎は、レンタカーを返してくるからと言ってその場を去った。

蘭は、階段を先にながっていた。

コナンも階段を上がり、もうすぐ階段を上がり終わると思った・・・

その時!

・・・グラッ!

「・・・うわっ!」

コナンは、目まいで階段を踏み外してしまったのだ。コナンは落ちると思ったが、

服部が支えてくれていた。

「おい!工藤。大丈夫か?」

服部は、突然階段を踏み外したコナンを見て心配そうに言った。

「・・・わりい・・・階段ぐらいで目まいが・・・」

コナンは、先生が運動制限と言った訳を理解した。そんなコナンの姿を見ていた服部は、

しばらくはサッカーは禁止と言われている親友を悲しい目で見ていた。コナンはそんな服部の

視線に気づき、笑顔でこう言った。

「・・・大丈夫だからさ！さっさと上がろうぜ！」

決して、大丈夫ではなかったが、服部の気持ちに気づいてコナンは全力を出して明るく

振舞っていた。そして、ドアを開けた。

「コナン君！久しぶりにおねーちゃん手作りのご飯作ってあげる！何が食べたい？」

さっきの出来事知らない蘭は普通に聞いてきた。コナンは何事も無かったかのように  
蘭と話していた。

「じゃあ、オムライスがいいな！」

コナンは、笑顔で言った。

「分かった。ちょっと待っててね！今作るから。」

蘭は、台所に向かい昼食を作り始めた。

27、落ちていく体力（後書き）

またもや、変な終わり方・・・すみませんっ！（汗）

28、久しぶりの・・・

しばらくしたら、蘭はオムライスを作り終わり、テーブルに作ったオムライスを並べた。

蘭は、コナン達に声をかけ、コナン達は席についた。

『いただきます！』

と一斉に言い、食べ始めた。しばらくすると蘭が話し始めた。

「コナン君、明日学校行けそう？」

蘭は、首をかしげ、聞いた。

「うん。大丈夫そうだよ。」

コナンは、答えた。服部は、少し不安な気持ちだった。

「先生に、体育を見学する事情は話しておくわね。」

蘭は、そう言った。

「ありがとう！蘭ねーちゃん。」

コナンは、笑顔でそう言った。しばらくすると、全員オムライスを食べ終わっていた。

『ごちそうさまでした。』

みんなが一斉に言うと、蘭は一番最初に席を立ち、みんなの食器を片付け始めた。

まとめた食器を台所に置き、コナンの薬と水を用意した。

「コナン君！はいお薬。これ毎食後みたいだから今飲んでね。」

蘭は、そう言うと、コナンに薬を手渡した。

「ありがとう！蘭ねーちゃん。」

そう言って、コナンは蘭から薬を受け取った。そしてコナンは二種類の薬を飲んだ。

コナンは薬を飲んだ後、ソファーに横になった。横になっている内に薬を飲んだからか

眠気が襲ってきた。コナンは、布団で眠ってしまっていた。

ーコナンは目を覚ました。コナンは腕時計を見ると夜中の2時だった。

コナンは随分寝たんだなと頭の中で思っていた。コナンは、けっこう寝たのにまだ眠く、  
また眠ってしまった。

28、久しぶりの・・・（後書き）

今回、すごく短くてすみません・・・  
次話はコナン、久しぶりの学校です。

## 29、蘭の気持ち(前書き)

どうも。桔梗です。今回も、短い&駄文でスミマセン・・・。

こんな駄文を読んでくれる方々ありがとうございますっ！

さておき・・・総合アクセス数 37000突破!!皆さんのお陰  
ですっ！

ありがとうございます！

## 29、蘭の気持ち

―翌日 朝7時―

コナンはあれから、翌日の朝まで目を覚まさなかった。

「……君……コナン君……」

コナンは、誰かの優しい声が聞こえ、目を覚ました。

「ん……？蘭……ねーちゃん。」

蘭だった。

「コナン君。大丈夫そう？」

蘭は、問いかけるように言った。

「うん！いつぱい寝たら、元気になったよ！」

コナンは、嘘ではなく、本当に昨日とは格段に体力が戻っているような気がしていた。

「そっか！良かったー！でも今日学校では無理しないようにね！体調が悪くなったら、

すぐに先生に言うのよ？」

蘭は、いつも無理しがちなコナンに強く言った。

「うん。分かったよ！蘭ねーちゃん！」

コナンは笑顔で、うなずきながら言った。

「じゃあ、ご飯作ったからリビングに来てね！」

蘭は、少し引きつった笑顔になっていた。

蘭には少し気がかりな事があったのだ。なぜなら、新一からここ一ヶ月くらい連絡が来ない事

だった。・・・それもそのはずだ。コナン「新一であるから、コナンは全然連絡が出来ないのだ。

しかし、蘭はその事情を知らないため、新一に何かあったのでは

ないかと不安であったのだ。

でも、蘭は毎日笑顔をコナン達の前では見せていた。しかし、それも限界が近かった。

「……蘭ねーちゃん？どうしたの？」

コナンは、気づかぬまま言った。蘭は、コナンになら話していいかなと思いい、口を開いた。

「……うん。最近、新一から連絡なくなってきた。どうしたのかな

あ……」

蘭は、今にも泣き出しそうな顔でうつむいてしまった。

「うーん。手がけてる事件が難航してるのかな？（……やべっ  
……すっかり忘れてた……  
今日電話しねーとな。）」

コナンは、心の中であせっていた。

少しの間、コナンと蘭の間で沈黙が続いた。服部は、気まずそうに布団の中にいた。

「……ごめんね！こんな事コナン君に言っても仕方ないよね。リビングに行こう！」

蘭は、また少し無理した笑顔を見せてリビングへと向かった。コナンは、蘭の後ろ姿を見て、心の中でつぶやいた。

「……ごめんな……蘭……」

コナンは、無理をしている蘭を見て、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。



## 29、蘭の気持ち（後書き）

次こそ、コナン学校です！  
少年探偵団がメインかな？

### 30、二人の思い（前書き）

桔梗です。かなり、急いで書いたので、変な所があるかもしれませんがそこはあまり気にしないで下さい。毎日、更新出来るように頑張ります。

### 30、二人の思い

「ごちそうさまでした！」

コナンは、蘭の作ったご飯を食べ終わり席を立った。そして、学校に行く準備をした。

「（えっと・・・教科書と・・・筆箱・・・）」

コナンは、必要な物をどんどんランドセルに入れていった。

「ふーっ・・・終わった。」

コナンは、準備が終わり、ランドセルを背負った。

「蘭ねーちゃん！行って来るねー。」

コナンは、少し早く家をでた。

「いってらっしゃいー！」

蘭は、コナンを笑顔で見送った。コナンが行った後しばらくぼっとしていた。

「……………新一……………」

その心の中で呟くと同時に、蘭の携帯が鳴った。

「……………え……………」

携帯画面を見ると、「工藤 新一」とでていた。

蘭は、すぐ携帯電話を手に取り、通話ボタンを押した。

「新一!?!?」

蘭は、無意識のうちに涙を流していた。

「ああ。ごめんな蘭。しばらく電話出来なくて。事件が難航して  
て……………」

コナンは、蝶ネクタイ型変声機でしか話せなくて蘭を心配させている自分を悔いていた。

「そうなんだ。良かった……。私、新一になにかあったんじゃないかって思ってたんだ。

でも、良かった……。新一の元気そうな声が聞けて。」

蘭は、涙を拭きながら言った。

「……。あつ……。ごめん。そろそろ、行かねーと……。」

コナンは、申し訳なさそうに言った。

「そっかぁ……。早く帰ってきてね……。」

蘭は、新一が帰って来れない事は頭でも分かっていたが、無意識にそう言っていた。

「……。じゃあな。また掛ける……。」

コナンは、電話を切った。

「……。新一！……。」

蘭は、少し表情が曇っていた。

コナンは、これ以上話を続けられなかった。  
自分の事で蘭を苦しめている自分に罪悪感を感じていた。

「（本当に……すまねえ……蘭……）」

コナンは、心の中でそう思いながら、通学路を歩いていた。

――しばらく通学路を歩き、学校に着いた。上履きを履き、自分の教室へと向かった。

教室に着いた。コナンは、教室に入った。

コナンの目の前には、驚く事が待っていた。



### 30、二人の思い（後書き）

コナン君。学校にとうとう到着！

次話は、少年探偵団とクラスみんながコナンのために・・・？

### 3 1、祝い（前書き）

すみません。今回かなり短いです。  
更新が二日の間できないかもしれません・・・

### 31、祝い

『パンツ！パンツ！』

コナンが、入った瞬間一斉にクラッカーが鳴った。コナンは、かなりびつくりしていた。

黒板には、「コナンくん！たいいんおめでとう！」と書いてあり、いろんな絵が書いてあった。

哀は、腕を組み壁にもたれ掛かっていた。

『コナン君！退院おめでとう！しばらく体育が出来ないって先生が言ってたけど、早く元気に

なっって一緒にサッカーやろうね！』

みんなが、少年探偵団の打ち合わせ通り、しゃべったのだった。

コナンは、静かに微笑み、少し肩の荷が落ちたような気がした。

「ありがとな！おめーら！」

コナンは、入院前のコナンに戻ったようで、みんなは安心していった。

ーキーン・・・コーン・・・カーン・・・コーン・・・。

チャイムが鳴り、横に座っていた小林先生が教卓の前に立った。

「みんなー。良かったですね！コナン君が学校に来てくれて。コナン君は、まだ久しぶりの学校はかなり大変だと思うので、コナン君が困っていたら、助けてあげてくださいねー！」

小林先生は、みんなに向かって言った。

『はい！』

みんなは、小林先生の言葉に元気よくうなずいた。一方、コナンはすごく恥ずかしそうに席に座った。そうすると、哀が少しからかうように話しかけてきた。

「良かったじゃない。みんな、あなたを助ける気満々よ？探偵さん？」

コナンは、また恥ずかしそうな顔になった。そしてこう言った。

「……ほっとけ!……」

コナンは、すっかり真っ赤になっていた。

### 32、ありがとう(前書き)

ども、桔梗です。

久しぶりに更新ですみません。短いですが、どうぞ鑑賞下さい。

32、ありがとう

「キーン・・コーン・・カーン・・コーン・・

一時間目が終わり、休み時間に入ろうとしていた。コナンはしばらく上の空だったが、

突然、声が聞こえてきて声のした方に振り返った。

「大丈夫ですか？コナン君。」

コナンの机の周りには、少年探偵団が集まっていた。

「ぜんぜん大丈夫だけど？」

コナンは、笑って返した。コナンは、さらに口を開いた。

「それより、さっきはありがとな！俺のためにこんな事してくれて。」

コナンは、嬉しそうに言った。すると少年探偵団が

「当たり前ーじゃねーか！団員が復帰したんだからよ！」

元太がそう言い、

「お礼するほどのことじゃありませんよー！」

光彦がそう言い、最後に

「それにね、最初は私達だけでやろうとしたんだけどみんながてつだってくれたんだ！」

歩美が言った。コナンは、少し微笑みながら言った。

「本当にありがとな・・・！みんな！」

コナンは、まだ体は弱くなっているが、いつも通りのコナンに戻っていた。

### 32、ありがとう(後書き)

かなり、急ぎましたので、へんな終わり方ですみません。  
10月かなり忙しいもので・・・でも、合間を見つけて頑張ります。

### 33、体の異変

「コナン達は、学校が終わり、少年探偵団達と途中まで一緒に帰り、別れた後は一人で

帰っていた。コナンは、学校にいた時から、異変が起こっていた。その異変は、めまいと

熱っぽさだった。コナンは、別れるまでは多少平気だったのだが、一人になった途端、

突然、具合が悪くなっていた。

「（・・・うわ・・・風邪か？すげえ、体が熱いし、めまいがするし・・・）」

コナンは、頭の中では、平気と思っているのだが、体は、大丈夫ではなかった。

「（・・・やっぱり、大丈夫と思ってても、免疫力は落ちているって事か・・・）」

頭で、いろんな事を考えていたが、意識が朦朧としてきた。

「・・・やべえ・・・」

一方・・・その頃・・・

哀は、少年探偵団達と一緒に帰っていたのだが、哀は、コナンの様子がおかしかったのを薄々感づいていた。そして、

「ごめん！みんな、先に帰っててくれる？私、寄る所があるから。」

「うん。じゃーね！哀ちゃん！」

少年探偵団達は、哀の嘘だとは気づかずに帰っていった。

哀は、コナンの帰った道をたどって行くと、倒れている人陰が見えてきた。

「（・・・！！・・・）」

道端に、倒れているのは、コナンだった。

哀は、コナンに駆け寄った。

「やっぱり・・・工藤君、無理してたのね・・・」

哀は、科学者で頭もいたため、応急処置方法は知っていた。哀は、阿笠博士に連絡をした後、

出来る限りの処置をしていた。

「・・・にしても・・・すごい熱ね。・・・でも、学校にいる時は、ここまで酷くは

なかったから、下校の時にぶり返したって所ね。」

しばらくすると、阿笠博士が来た。一様、風邪なので、阿笠博士の家にコナンを連れて行った。



### 33、体の異変（後書き）

かなり、短くてすみません。ここ最近は、かなり短い更新ですが、どうぞよろしくお願いします。

### 34、コナンの風邪から・・・（前書き）

かなり、更新の遅れてしまった桔梗です。しばらく書いてない間に、感想で、

「更新待っています。」という声多数で本当にありがとうございます。

待っていてくれた方々。久しぶりの更新で、まさかの展開!?

サブタイトルが思いつかないんですが、この話読んで、いいサブタイトルを思いついた方、活動報告にコメントお願いします。

### 34、コナンの風邪から・・・

ーコナンは、博士の家のベッドに横たわっていた。コナンは、博士の家に着いてから

目を覚ましていない。哀と博士は、コナンの看病をしていた。コナンは、38.7と

かなりの高熱を出していて、起きる様子は無かった。しばらくすると、博士の家に、

一本の電話がかかってきた。

ープルルルツ・・・ガシヤツ。

博士は、かかってきた電話を手を取った。かかってきた相手は蘭だった。

「おおっ！蘭君か！どうかしたのか？」

博士は、見当がついたが、蘭に聞いてみた。

『コナン君がね、まだ帰ってこないのよ・・・博士の所にいる？』

蘭は、すごく心配そうな声を出していた。

博士は、電話のマイク部分を押さえて哀の方を向いた。哀は風邪の事は言わないでと

小声で言った。博士は不思議に思いながらも話し始めた。

「いる事にはいるんじやが、わしの作ったゲームにすっかりはまってしまつてのー。」

帰らないと言っているんじや。」

博士は、嘘ではないように話した。

『・・・えっ・・・そうなの。』

蘭は、少し困った顔で言った。

「だから、コナン君は、わしの家に泊まらせるから、蘭君心配せんでいいよ。じゃあ。」

ブチッ・・・

博士は、電話を切った。

『・・・ちよつと！博士ー！もうコナン君たら・・・せつかく夕飯作ってたのになあ。』

蘭は、すこし呆れたような顔で微笑した。

ー博士の家ー

「哀君？なぜ、蘭君に本当の事を言わなかったんじゃ？」

博士が、不思議そうに言った。すると、哀が口を開いた。

「風邪をひいた工藤君で、試したい事があるのよ。もっとも、工藤君の熱がもう少し

下がったらの話なんだけど。」

哀は、クールな口調で言った。

「試したい事・・・ってまさか!？」

博士は目を見開いて言った。

「そう……今の小さい工藤君を戻すのよ。この間作った解毒剤の試作品で……。」

高校生探偵の工藤新一に。」

### 34、コナンの風邪から・・・（後書き）

すごい展開になりました！終わらせる予定だったのに・・・10月で終わるのか？

終わらない気がする・・・って感じですが、どうぞよろしくおねがいします。

### 35、目覚めたコナン（前書き）

どうも。桔梗です。

前回、びっくりな終わり方をしましたねー！感想でも、

「どうなるのか楽しみです！」とか、

「まさかの展開ですね！」とか、

「気になります！」など、

いろいろな感想ありがとうございます。

感想をたくさんもらえてすごうれしかったです！

今回は、コナン、哀、博士です。どうぞ、お楽しみ下さい。

### 35、目覚めたコナン

「博士の家」

「今の新一を戻すのか？」

博士は、哀に聞いた。

「ええ。この間作ったAPT-X4869の解毒剤の試作品。推測だと、72時間持つはず・・・。」

哀は、データを見ながら言った。

「でも、工藤君が服用した時のデータから推測すると、72時間は持たない可能性は、あるわね・・・。」

哀は、コナンの方を見ながら言った。

「そうか・・・。」

博士は、納得したように頷いた。

「まあ、とにかく工藤君が目覚めるまでは出来ないわね。博士、工藤君の熱測つて。」

「分かった。」

博士は頷き、哀は、地下の研究室に向かった。

「体温計・・・体温計・・・あつた!」

博士は、体温計を手に取り、体温計をコナンの脇に挟んだ。すると・・・

「・・・うっ。。。」

コナンは、苦しそうな声を出していた。

「・・・新一君!？」

博士は、驚いた声でコナンを見た。コナンは、ゆっくりと目を開けた。

「・・・博士？ていうか、なんでここに？」

コナンは、自分が何でここにいるのかが疑問だった。

「君は、学校の帰宅途中で倒れたんじゃないよ。それで、哀君が君の体調に気づいて、

皆と別れて君が行った方の道に向かったんじゃない。それで、哀君は、わしに電話をして、

わしは、哀君に言われた所に向かったんじゃない。」

博士は、あつた事を正確にコナンに話した。

ーピピッ！ーピピッ！

体温計が鳴り、博士は、体温計を手に取り、体温計の画面を見る  
と、

38.5 と下がってはいるが、まだ高熱だった。

「新一君、下がってはいるが、まだ高熱じゃな・・・。」

博士は、体温計を見ながら言った。  
すると、哀が、地下から上がってきた。

「……灰原……」

コナンは、風邪で辛そうな声で哀の名前を呼んだ。

「38.5 ねえ……。まだ無理ね……」

哀は、体温計を見て言った。一方なんの事だかさっぱり分からないコナンは、  
首をかしげていた。

「……なんの事だよ？灰原？」

コナンは、不思議そうに聞いた。

「工藤君がいつも楽しみにしている事よ。」

哀は、遠まわしに言ったが、コナンは、その一言で何なのかが分

かった。

「・・・もしかして・・・戻れるのか!？」

コナンは、突然大声を出したせいで、目まいがした。コナンは、倒れそうになったが、博士が、肩を支えてくれていた。

「・・・わりい。博士。」

コナンは、博士の方を向いた後、すぐ哀の方に向いた。

「薬の持続時間は約72時間。でも、工藤君の服用データを見ると、誤差が出て、時間が早まると考えた方がいいわね。どれくらい早まるかは、私でも分からないわ。」

哀は、コナンに説明した。

「・・・そうか・・・」

コナンは、納得をした。そして、すぐにでも戻りたいような顔を

していた。

「分かっているとは思っけど、熱がもう少し下がってからよ？高熱だと危険だから。」

哀は、分かっているコナンに説明するように言った。コナンは、ため息をついた後、

「・・・わあってるよ・・・」

コナンは、気落ちした顔をしていた。哀は、クスツと笑った。

「飲みたいんだったら、早くその高熱を下げることね・・・。」

哀は、意地悪そうに言った。コナンは、布団に潜り、呟いた。

「・・・灰原のヤロオ・・・」

コナンは、そう呟き、しばらくすると眠りについた。



### 35、目覚めたコナン（後書き）

哀は、けっこう難しいですね。薬の持続時間は三日にしましたが、とくに意味はありません（笑）。次話は、コナンの熱は37 台に下がり、ネタバレいよいよ。。。。。

36、高熱から微熱に……。そして……。(前書き)

お待たせいたしました。桔梗です。

今日は、こんな遅い時間になってしまい申し訳ございません。予想以上に時間をくってしまいました……。感想お待ちしております。

36、高熱から微熱に……。そして……

「コナンは、灰原にからかわれて、布団に潜ったのだが、いつのまにか眠りについてた。」

コナンが、眠っている間に博士と哀がコナンの看病をしていた。

コナンは、あれから、次の日まで目が覚めなかった。

「次の日……」

コナンは、朝の八時に目が覚めた。博士は、寝ていたのだが、哀は起きていた。

「あら……。工藤君、目が覚めたの？」

その時、哀は、コーヒーをカップに注いでいた。

「灰原。起きてたのか？」

コナンは、その言葉と同時に起き上がった。

「ええ。最終確認をしたのよ。はい。」

哀は、コナンにコーヒーを手渡した。コナンは、ありがとうと言  
いカップを受け取った。

「あなたは、昨日のうちに高熱は下がったわ。でも、念のため。」

哀は、コナンに体温計を渡した。コナンは、体温計を受け取り、  
脇に挟んだ。

「看病してくれたのか？俺全然、気がつかなかったけど……。」

コナンは、まだ具合が悪いのか、ベッドに体を寝かせた。

「看病と言っても、私はほとんどしてないわ。していてくれたの  
は博士よ。」

哀は、博士の方を見て言った。

「そっか……。でも、ありがとな。お前も解毒剤とか作ってくれ  
たんだろ？」

コナンは、コーヒーを飲みながら言った。

「そんな事は、お礼を言われる程の事ではないわよ……。私がやらなくちゃいけない事  
なんだから……。」

哀は、自分の責任感を重く感じていた。

哀が、徹夜したのは、失敗を起こさないようになるのだ。

ーピピッ!…ピピッ!…

部屋で、電子音が鳴り響いた。コナンは、体温計を手に取り、哀に手渡した。

「37.5 ね。これくらいなら、解毒剤を飲んでも大丈夫そう  
ね。」

哀は、体温計を見て、そう呟くと、コナンが喜んでいた。

「よっしゃ！元に戻れるんだな？やったぜ！」

そんなコナンの声を聞いていた哀は、いきなり釘をさすような事を言ってきた。

「言つとくけど、元に戻る際は、かなり体力を必要とする。朝食を食べてからよ？」

コナンは、少々納得のいかない様子だったが、すぐに頷いた。哀は、キッチンに向かい朝食を作り始めた。少しした後、博士が起きた。

「博士、起きたのか？」

コナンは、音で気がつき、博士の方を向いて言った。

「新一君、熱下がったんじゃない！」

博士は、まだ辛そうだが、昨日より元気そうなコナンを見て、嬉しそうな顔をしていた。

「ああ。おかげ様で。ありがとな。博士。」

コナンは、笑って言った。その後、コナンの携帯が鳴り響いた。

「ん・・・？新一の方の携帯だ。誰からだろ？」

しばらく考えた後、通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『いるんやったら、さっさとらんかい！！ドアホ！！』

コナンは、服部のでかい声に思わず、携帯電話を遠ざけた。

「悪い・・・悪い・・・服部。」

『ん？工藤。具合悪いんか？』

服部は、声が元氣のない事で、コナンが具合が悪い事を言い当てた。

「ああ。昨日からな。でも、昨日よりは具合は良くなったよ。」

『そうなんか……。あ、じゃあ明日からの三連休そっちに行つたるわ。』

服部は、またいつものように勝手に決めていた。

「まあ、いいけど。」

『あ、じゃあ工藤。そろそろ学校行かんといけへんから。じゃあな。工藤。ブチツ……。』

「ツーツー」。

「（・・・早ツ・・・）」

コナンは、携帯を見ながら頭の中で呟いた。  
しばらくすると、朝食ができ、テーブルで食べた。

「数分後・・・」

コナンは、食べ終わった食器を流しに置いた。

「工藤君。」

哀は、コナンを呼んだ。コナンは、哀の所へ向かった。

「はい、これ。解毒剤。持続時間は、昨日言った通りよ。自分の部屋に行くんでしょ？」

念のため、体が元に戻ったらこっちにまた戻ってきてよね。」

哀は、コナンに解毒剤の試作品を手渡した。

「分かった。ありがとな！灰原。」

コナンは解毒剤を受け取り、隣の自分の家に走って向かった。



36、高熱から微熱に……。そして……。(後書き)

新一に戻る所まで書きたかったのですが、書く区切りが悪くなるので、次話で……。次話は、新一復活！

### 37、工藤新一の復活！（前書き）

また、今日も遅い投稿で申し訳ありません。少し急いで書いてしまったので、なにか妙な点があるのは、お許し下さい……。ところ、今回いよいよ・・・新一復活！

### 37、工藤新一の復活！

「コナンは、博士の家を出て、隣の自分の家に入り制服に着替えた。

「・・・よし、久しぶりに元の体に戻れるぞ・・・」

コナンはそう思いながら、薬を飲んだ。そして発作が起きた。

「・・・うつ・・・来た・・・」

コナンにいつもの発作が襲いかかる。そして、

「（・・・ドクン・・・ドクン・・・！！）！！うあああああ！！」

コナンは、激しい痛みに襲われた後、気を失っていた。だが、五分後、

「・・・ん・・・」

新一は、起き上がった。どうやら、無事に戻れたようだ。だが、新一はかなり体力を消耗したらしくかなり疲労感がすごかった。

「・・・あつ、そうだ。博士の家に一回戻らねーと・・・。」

新一は、自分の家を出て博士の家に向かおうとした。その時、ポストに何かが入っている事に気がついた。

「・・・なんだろ？これ？」

新一は、封筒をとりあえずポケットにしまい、博士の家に向かった。

「博士の家ー」

「・・・灰原ー！」

新一は、いつものように呼んだ。

「あら……。遅かったわね。てつきり、死んでるのかと思ったわ。」

哀は、冗談を真顔で言った。

「お前……。洒落にならねえ冗談をよく真顔で言えるよなあ……」

新一は、真顔で言う哀を恐ろしいと思いつつながら、苦笑した。

「あれ？博士は？」

新一は、辺りを見渡してもいない博士に気づき、哀に聞いた。

「博士なら、買い物に行ったわ。」

新一は、哀の言葉に納得し、哀の方に向いた。

「……それより念のため、熱を測ってくれる？」

哀は、新一に体温計を渡した。

「へいへい……」

新一は、渡された体温計を脇に挟んだ。

「あと、これ。」

哀は、何かの薬を渡した。

「何だよ？これ。」

新一は、不思議そうに聞いた。

「栄養剤よ。あなた、かなり疲労感があるはずよ。だから、それを飲めば、

少しは楽になるはず。あとは睡眠をとることね。」

哀は、新一のデータを見ながら、言った。

「ふーん。ありがと。灰原。」

新一は、そう言って栄養剤を飲んだ。それと同時に体温計が鳴った。

「ピピッ！ピピッ！

新一は、哀に体温計を渡し、さっきの手紙の事を思い出した新一は、その手紙を

ポケットから取り出した。

「ねえ。工藤君？また熱が上がってるみたいだけど、大丈夫？」

体温計には、38.0 と表示されていた。

「え？ああ。大丈夫だよ。それより・・・」

新一は、自分の熱の事より、封筒の方が気になっていた。

「何？それ。」

哀は、新一が持っている封筒を見ながら、言った。

「俺んちのポストに入ってたんだよ。まだ読んでねーんだ。だから、今読もうと思って・・・」

新一は、近くにあったハサミで封を切り、中の手紙を読み始めた。



### 37、工藤新一の復活！（後書き）

封筒の中身の手紙の内容とは・・・

また、事件発生！次話をお楽しみに！

感想よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0258w/>

---

親友との間に起こる悲劇

2011年10月13日01時04分発行